



Title	南アフリカ政党政治の多元化
Author(s)	細井, 友裕
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2025, 36, p. 44-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

南アフリカ政党政治の多元化

Pluralisation of South African Politics

細井 友裕*

Hosoi, Tomohiro

0. はじめに

2024年5月の総選挙は、民主化後の南アフリカ政治に一つの区切りをもたらした。1994年のアパルトヘイト終結以来、30年にわたり与党の座を占めてきた与党アフリカ民族会議(African National Congress: ANC)の国民議会(下院)獲得議席が、はじめて過半数を割り込んだのである。ANCの獲得議席は400議席中159議席(39.75%)で、議会第1党の地位こそ守りはしたもの、シリル・ラマポーザ(Cyril Ramaphosa)大統領は他党との連立政権の樹立を交渉する必要に迫られた。1か月以上にわたる交渉の末、2024年6月30日にANCほか9党を閣僚に含んだ第3次ラマポーザ内閣が発足した(Ferreira and Harper 2024)。「国民統合政府(Government of National Unity)」と名付けられたこの政府は、1994年から1996年までの第1次ネルソン・マンデラ(Nelson Mandela)政権以来の連立政権となった。マンデラ政権の場合は民主化の移行交渉と暫定憲法に基づく連立内閣であり、議席の約6割をANCが確保していた(Southall 2014)。ANCの議席が過半数割れを起こした状態で連立内閣が形成されるのは、2024年の選挙が民主的南アフリカでは初の事態となる。

既に指摘されている通り、2024年選挙でのANCの敗因は、民族の槍(Umkhonto weSizwe: MK)の結党によるものである(牧野 2024)。ジェイコブ・ズマ(Jacob Zuma)前大統領と彼を支持する一派が2023年12月にMKの樹立を宣言、国民議会選挙に立候補した。ANCはズマを除名した。ズマ本人は刑事裁判での有罪判決を受けていたために立候補を認められなかつたが(BBC 2024)、MKは議会第3党となる58議席を獲得した。ANCが獲得した159議席とMKの58議席を合わせると、217議席と過半数を上回る(Electoral Commission of South Africa 2024)。改選前のANCの議席は230議席だったので、MKの離党がなければ、前回選挙より議席は減らしても、ANCの単独過半数は維持できたはずである。MKの離党がANCの過半数割れの最大の要因であることは疑いようがない。

MKに限らず、今回の選挙では小政党の存在感が無視できない。ANCの獲得議席は159議席だから、連立により42議席を確保できれば過半数は維持できる。連立政権には87議

* 東京大学社会科学研究所特任研究員 (The Institute of Social Science, the University of Tokyo)

本稿の執筆にあたり、匿名の査読者ならびに編集部から有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

席を獲得した議会第2党民主同盟 (Democratic Alliance: DA) が加入しているので、ANCとDAのみで過半数を維持できる。しかしラマポーザはインカタ自由党 (Inkatha Freedom Party: IFP) ほか小政党とも連携を進め、閣僚が所属する政党の議席の総数は 287 議席となった (表1 参照)。これにより、ANCとDAの間で対立が生じ DA が連立を離脱した場合でも 200 議席を維持できる。ラマポーザは DA の発言力の増強を牽制する目的で、DA が離脱しても政権を維持できるよう小政党の囲い込みを図ったようだ (Ferreira 2024)。

では、民主化後の南アフリカの政党政治の構造はどのように変化してきたのだろうか。新たな政党はどのように出現し、その結果として南アフリカの政党政治の構造はどのように変遷してきたのだろうか。

本研究は、制度設計の帰結として、南アフリカでは既存の大政党からの分裂によって小政党が生まれ、その結果として多元性が増していることを論じる。この主張は 2 つの側面から議論できる。第 1 に、既存の選挙制度が有力政治家の離党を促している側面を示す。南アフリカの国民議会選挙では名簿式比例代表制がとられている。この制度のもとでは、名簿を設定できる党執行部の権限が大きい。一方、特定の地域に基盤を持つ場合や、全国で 0.5% 以上の支持を期待できる場合は、小政党でも国民議会に議席を得られる。したがって、党内で冷遇されている派閥指導者は、離党して自分の党を立ち上げるインセンティブを持つのである。

表 1 2024 年南アフリカ国民議会選挙の結果

政党名	略称	獲得議席数	入閣
African National Congress	ANC	159	○
Democratic Alliance	DA	87	○
Umkhonto Wesizwe	MK	58	
Economic Freedom Fighters	EFF	39	
Inkatha Freedom Party	IFP	17	○
Patriotic Alliance	PA	9	○
Action SA	Action SA	6	
Vryheidsfront Plus	FF+	6	○
African Christian Democratic Party	ACDP	3	
United Democratic Movement	UDM	3	○
African Transformation Movement	ATM	2	
Al Jama-ah	Al Jama-ah	2	○
Build One South Africa With Mmusi Maimane	One SA	2	
National Coloured Congress	NCC	2	
Rise Mzansi	Rise Mzansi	2	○
Good	GOOD	1	○
Pan Africanist Congress Of Azania	PAC	1	○
United Africans Transformation	UAT	1	

出典：Electoral Commission of South Africa 2024 のデータをもとに筆者作成

第2に、南アフリカの政党政治の構造は、2010年代に ANC および DA からの分裂を通じて多元化してきた。南アフリカの政党政治は 2010年代以降、多元性を増している。しかし新たに出現した政党は ANC または DA から分かれた政党である。つまり、既存政党の派閥の一部が政党として独立したことで、政党政治が多元化したように見えるのである。南アフリカが採用している比例代表制は、既存政党の分離や多党制化を生み出しやすい設計になっている。その意味で、南アフリカは ANC の一党優位体制から、民主化移行当初に目指された多極共存型民主主義に近づいていったといえるだろう。

本論文の構成は以下のようになっている。第1節では南アフリカの政党政治をめぐる既存の議論を整理する。第2節では選挙制度に注目しつつ、敗れた党内派閥が離党し新党を立ち上げる事例を描く。第3節では南アフリカ選挙管理委員会のデータに基づいて、南アフリカの政党政治の構造の変遷を比較可能な客観的な指標に基づいて観察する。

1. 民主化後南アフリカの政党政治

この節では 1994 年の民主化後の南アフリカにおける政党政治に関する既存の議論を整理する。まず、南アフリカの選挙制度と比較政治学上の南アフリカの特異性を議論する。次いで 1990 年代以降の選挙政治をめぐる議論を整理する。これまでの研究は主として ANC の一党優位が続く要因に対する関心が強かった(Khambule et al. 2019)。しかし既存の研究は南アフリカの政党政治の全貌を描き切れていないこと、比較の視座が欠けていることを指摘する。

1.1. 南アフリカの選挙制度と特異性

まず、南アフリカの選挙制度に関する議論を整理し、比較政治学分析上の南アフリカの特異性を浮き彫りにしたい。

アパルトヘイトからの移行交渉の過程で、アパルトヘイト期の与党である国民党 (National Party) は多極共存型民主主義 (Consociational Democracy) を理想とし、特に比例代表制の導入を強く求めた(Habib 2013)。多極共存型民主主義は、アレンド・レイプハルト (Arend Lijphart) がオランダやベルギーなどの多元的な社会の事例から導き出したモデルである。多極共存型民主主義は、比例代表制により様々な利益集団が代表されるように保障すること、選出された政党指導者の間で交渉と妥協により政治を進めていくものであり、イギリスやアメリカでみられる勝者総取り型・多数決型民主主義とは異なる民主主義の姿である(Lijphart 2012)。オランダ系のレイプハルトが 1980 年代にやはりオランダ系であるアフリカーナーへの改革案としてアドバイスしたこともあり、ANC の圧倒的優位が想定される中で、国民党は多極共存型民主主義の実現を求めたのだった(Giliomee 2012: 168-171)。

1994年以降の南アフリカでは、上院（全国州議会、National Council of Provinces）と地方政府を除き、制限名簿式比例代表制が採用されている。大統領の選出など国政の中心を担う国民議会（下院）の選挙制度は次のようなものだ。有権者は一つの政党に印をつけて投票し、各政党の獲得票数は全国規模および州ごとに集計される。国民議会の定数は400議席である。うち200議席は全国区、残る200議席は9の州から選出される。州からの選出議席数は人口比に応じて割り当てられており、2024年の選挙では北ケープ州が最も少ない4議席、ハウテン州が最も多い47議席である（Electoral Commission of South Africa 2024）。

議員は政党があらかじめ提出した選挙名簿に則って選出される。各政党は利用する名簿について2つの選択肢を持つ。1つは全国統一の単独名簿の利用である。政党は单一のリストをあらかじめ選挙管理委員会に提出する。選挙管理委員会はその政党全国区の割り当て議席数と各州の割り当て議席数の合計人数を、リスト上位から選出する。例えばある政党が全国で50人、各州で10人の割り当てとなった場合、リストの上位60人が議員として当選する。もう1つの方法は全国と州で別々のリストを利用する方法である。政党は全国区と各9州で合計10のリストを準備し、選挙管理委員会に提出する。選挙管理委員会は、その政党の全国割り当て分を全国リストから、各州の獲得議席を各州のリストから選出し、その政党の当選者数を確定させる。いずれの方法をとるかは、各政党が決定できる（Electoral Commission of South Africa 2024）。

比例代表制の特徴は2点にまとめられる。第1に政党執行部が強い力を持ちやすいこと、第2に小政党であっても議席を獲得する見込みがあることである。

第1に南アフリカでは政党の執行部が強い権限を持ちやすい。所属政治家にとって、自身が政党リストのどの順位に位置づけられているかは死活的に重要である。政党が100議席を獲得しても、リスト101位の政治家は議員にはなれない。仮に政党が前回選挙よりも支持を伸ばしたとしても、自身がリストの高い順位になければ候補者は議員になれない。政治家にとって死活的に重要な政党リストの作成は、党の執行部が一手に担う。したがって、党内の派閥の力関係や勢力状況がリストに如実に表れる。実際、南アフリカの国政政治家は政党執行部に向けて自身をアピールすることが多い反面、有権者への関心は薄いことが問題視されてきた（Alence and Pitcher 2019, Lieberman 2022）。

第2に、小政党であっても議席を得られる確率が高いことである。特に全国規模の知名度がある候補者や、特定の地域に強い支持基盤を持つ場合、小政党であっても議席を得ることは可能である。上述の通り全国区では200議席が割り当てられている。つまり、0.5%の得票毎に政党は1議席を得られる。2024年選挙では約1600万人が投票したので（Electoral Commission of South Africa 2024）、約8万人の支持者が見込めれば1議席が獲得できる。また、全国区の支持がなくとも、特定の地域に強い地盤を持つ場合には、各州の議席割り当てからの選出を期待できる。

しかし南アフリカは選挙制度において比例代表制という多極共存型の特徴を共有しつつ

も、ほかの事例とはやや異なる政党政治の様相を見せてきた。比例代表制のもとでは小政党にも当選のチャンスがあるため、中小規模の多数の政党が議席を獲得し、連立政権が形成されやすいことが想定される。実際、レイプハルトが分析したオランダやベルギーの場合、比例代表制のもとで 6-7 程度の政党が議会に議席を獲得し、連立政権を組むのが常であった(Lijphart 2012)。しかし南アフリカの場合、比例代表制を採用しているにも関わらず、ANC の一党優位が続いているという点で特異な事例とされてきた(Habib 2013)。ANC は 1994 年の選挙以来、2010 年代に至るまで 50%以上の得票率を維持し続ける一党優位性であり、比例代表制をとる国の中では特異な例であった。

1.2. これまでの南アフリカ選挙政治：人種と階級をめぐる問題

南アフリカの選挙政治上の特異性はどのように議論されてきたのだろうか。南アフリカの選挙政治はどのように変遷してきたのだろうか。1994 年以降の分析は、人種と階級をめぐる論点から整理されてきた。人口の圧倒的多数を占める黒人票を取りまとめた ANC は移行当初に一党優位を確立した。しかし白人政党が黒人への支持基盤拡大を目指したり、ANC 内部で格差をめぐる対立が分裂を招いたりしたことで、有力な野党が出現しつつある。

南アフリカ最初の民主的選挙が行われた 1994 年から、ターボ・ムベキ (Thabo Mbeki) 政権が終わりを告げた 2009 年の選挙までの南アフリカ政治は、ANC の一党優位として特徴づけられる。ANC を凌駕する政党は存在せず、野党は限られた地域やグループの人々に支持されたごく弱い存在に過ぎなかった。

黒人の多数から支持を受けた ANC とは対照的に、人種や民族的背景を超えて支持を拡大できた政党は少なかった。アパルトヘイト期の与党である国民党は、1994 年の選挙で白人やカラードの支持を受けて 20%の議席を得ていた。しかし 1980 年代以降、極端な保守派は党を去り、国民党自身は穏健な政党になっていたとはいえ、アパルトヘイトを進めてきた政党というネガティブなイメージは払拭できなかった。結局、1996 年の連立政権からの離脱とフレデリック・デ＝クラーク (Frederik De Klerk) 元大統領の引退後、国民党は迷走の末に自壊した。インカタ自由党 (IFP) はズールー人を基盤とし、クワズールー・ナタール州やハウテンを中心に 10%程度の支持を得ていたものの、民族的特性もあって広い支持を獲得するには至っていなかった(Africa 2019, Southall 2014, Southall 2022: 157-160)。

これに対し、ANC は解放闘争のレガシーや政府機構を用いたある種のパトロネージの分配によって、人口の大多数を占める黒人を中心に安定した支持を確保してきた。ANC は解放闘争の中心的な存在であり、ANC は民主化や解放の成果を誇示できた。また、黒人経済力強化 (Black Economic Empowerment: BEE) を口実に支持者企業を入札で優遇したり、アファーマティブ・アクションを理由に支持者を雇用したりと、政府の政策や制度を用いたパトロネージによって支持を定着させようとしてきた。この時期の ANC は 60%以上の支

持を安定して獲得していた(Booysen 2011)。

しかし民主化から10年あまりが経つと、主に経済格差を理由にANCに対する不満が表明されるようになった。ムベキ政権(1999-2007)では、比較的高い経済成長が実現する一方で格差が顕在化していた。電気や水道といった政府から提供されるべき基礎サービスの不足、高すぎる失業率などの問題は、とくに貧困層の間にANCに対する不満を呼び起し、暴力的な抗議運動も展開されるようになった(Alexander 2010, Southall 2009)。

こうした背景のなかで、成立したのがズマ政権である。ズマはムベキへの対抗的な姿勢で左派的な党内派閥の支持を集め、2007年の総裁選でANC総裁の座を手にした。2009年の選挙でANCは65%の議席を獲得し、ズマは大統領に就任した。この得票率は2004年選挙の69%には及ばないものの、リーダーの交代に人々が期待していたことがうかがえる(Alexander 2010, Southall 2009)。

しかし、ズマ政権を通じてANCの支持は低下傾向を見せていく。主な理由は2つある。ズマを含むANCの汚職体質が問題になったこと、そして野党の伸長である。

ズマ政権では、ズマ自身を含むANCの汚職が顕在化した。とくに重要な事件が国家捕獲(State Capture)と呼ばれるスキャンダルである。国家捕獲ではズマの家族や知人が政府入札で不当に優遇されていた。国家捕獲は護民官による調査命令を経て政治問題化した。2017年のANC総裁選では、ンコサザナ・ドラミニ=ズマ(Nkosazana Dlamini-Zuma)を推挙しズマを支持する派閥と、シリル・ラマポーザを推す反ズマ派に二分され、熾烈な争いが繰り広げられた。ラマポーザが勝利するとズマは任期終了前に辞任し、国家捕獲の調査が行われた。2019年に行われたラマポーザ体制最初の選挙でANCは苦戦し、1994年以降最低の57.5%しか獲得できなかった(Alence and Pitcher 2019)。

しかしANCが支持を減らした要因はANCの不祥事ばかりではなく、野党の善戦のためでもある。ズマ政権を通じて伸長してきた野党は、民主同盟(DA)と経済的自由の戦士(Economic Freedom Fighters: EFF)である(Africa 2019)。

アパルトヘイト期の白人野党に源流を持つリベラル政党のDAは、人種を超えた支持を集め取り組みを強化してきた。アパルトヘイト体制に批判的な白人たちは、進歩党(Progressive Party)を組織し、議会制の枠内からアパルトヘイトを打破しようとしてきた。1989年に民主党(Democratic Party)に改名したのち、ヘレン・スズマン(Hellen Suzman)やフレデリック・ファン・ツァイル・スラベルト(Frederik van Zyl Slabbert)ら指導層は、国民党とANCの交渉を仲介するなど、南アフリカの体制移行プロセスの中で側面的ながら重要な役割を果たしてきた(Giliomee 2012: 210-238)。1994年の選挙で民主党は1.73%の議席を得たにとどまり、マンデラ内閣にも参加していない。しかし国民党の合流などを経て1999年にDAに改名・改組すると、少しづつ党勢を拡大していった(Southall 2022)。

DAの党勢拡大の要因の一つが、2010年代に積極的に行われた支持層拡大の取り組みである。DAは白人政党としての期間が長かったため、党員や支持者は白人中心であった。

2007年に党首となったヘレン・ジレ（Hellen Zille）は黒人タウンシップでのキャンペーンやコーサ語でのスピーチなど、黒人からの支持拡大を目指した。また、ジレが西ケープ州知事に就任すると、若い黒人党員であるムムシ・マイマネ（Mmusi Maimane）が党首を継ぎ、白人政党のイメージからの脱却を図ってきた。このような取り組みの結果、西ケープ州や大都市圏で DA の支持は拡大した。DA の得票率は 2004 年に 12% に過ぎなかったが、10 年後の 2014 年には 22% にまで増加している(Butler 2017, Africa 2019)。

ANC の現状に不満を持つ若手左派党員により設立された EFF も、強力な野党として勢力を強めてきた。EFF は 2013 年にジュリウス・マレマ（Julius Malema）元 ANC 青年同盟議長が ANC を離党して結成した政党である。土地の再分配や鉱山国有化など急進左派的な政策、黒人中心的な言説の展開は、白人や富裕層から警戒される反面、貧困層や若年層から一定の支持を集めてきた(Butler 2017, Cooper 2015, Kanyane 2021, Copeland 2021)。実際、EFF 結党後最初の国勢選挙である 2013 年選挙では 6% の支持を得て、ANC、DA に次ぐ第 3 党となった。2019 年選挙では 10.8% とさらに党勢を拡大した(Kotze and Bohler-Muller 2019)。

以上のような分析に基づき、2010 年代から 2020 年代初頭にかけての南アフリカ政治分析は以下の 3 点の見通しを持たれていた。第 1 に ANC の長期的な凋落傾向が確認できる。汚職や現政権への不満などから、ANC は着実に支持を減らしてきた。第 2 に ANC に対抗する野党が出現しつつある。DA や EFF は ANC を凌駕するほどではないにせよ、着実に支持を伸ばしてきた。したがって、第 3 に、近い将来に ANC が過半数を割り込み、ANC、DA、EFF の間で連立政権が発足する可能性が考えられた。そこで、ANC に加え DA や EFF に関する情報に关心がもたれ、研究が蓄積されてきたのである(Khambule et al. 2019, Kotze and Bohler-Muller 2019, Schulz-Herzenberg 2019)。

1.3. 先行研究の課題

以上のような各時点での現状分析は説得的だが、南アフリカの政党政治の構造の変遷を十分に説明しているとはいがたい。たしかに ANC の優位は揺らぎつつある。黒人への支持基盤拡大を目指してきた DA や ANC に不満を持つマレマらが離脱してきた EFF は、ANC に対抗する強力な野党になりつつある。しかし、主要政党についての議論が展開される一方で、小政党の存在や小政党が出現した経緯にはほとんど関心が払われていない。

小政党は南アフリカの選挙政治の中で無視できない存在になっている。第 3 次ラマポーザ内閣には ANC を含む 10 政党が参加している（表 1 参照）。このうち、ANC、DA、IFP の 3 党を除く 7 政党の獲得議席は 10 を下回っており、小規模な政党である。また、2024 年選挙で国民議会に議席を得た政党のうち、獲得議席が 10 を下回る政党は 13 あり、その合計は 40 議席、つまり全議席の 10% にあたる（Electoral Commission of South Africa 2024）。このような小政党はどのような経緯で出現し、南アフリカ政党政治の中でどのような経験を

たどってきたのだろうか。

もう一つの課題は、分析における数値化の欠如である。既存の研究では獲得議席数を除いて指標に基づく分析はほとんど行われてこなかった。南アフリカは多極共存型民主主義の中では特異とされるが、DA や EFF、小政党の増加によって、多極共存型民主主義に近づいたといえるのだろうか。南アフリカ一国の経時的な変化に加え、類似の国との比較を考えるために統一の尺度で測定し、評価する必要がある。

したがって、南アフリカの現在の政党政治を理解するためには、2つの取り組みが必要である。第1に大政党だけでなく、小政党を含めた全政党の経験を整理する必要がある。第2に、小政党を含めた南アフリカの政党政治の構造を、広く用いられた指標に基づいて計測する必要がある。

2. なぜ離脱するのか？：制度に基づく説明と事例

2024年の競合的な選挙や小政党を巻き込んだ連立政権の誕生をより精緻に理解するためには、小政党が成立する理由を分析する必要がある。この節では政治家が新党を立ち上げるモチベーションを説明するとともに、具体例を確認する。

ここでは制度的要因と党内の派閥争いの2つの面から新政党の発生を説明する。第1に、南アフリカの選挙制度は知名度や地域的基盤の強い政治家が自立するインセンティブを作り出しているということである。第2に、離脱する政党は党内での主導権争いに敗れた派閥であるということである。つまり南アフリカでは、新党を生み出しやすい制度状況のなかで、党内派閥闘争に敗れた有力者が離脱し、新党の形成が相次いでいるのである。

この節は2つの構成を取っている。まず南アフリカの選挙制度から、派閥抗争に敗れた有力政治家にとって新党形成が有力な選択肢となり得ることを示す。第2に、2010年代にANC および DA から派生した4つの政党が形成される過程を事例検証として観察し、以上に示した議論の妥当性を論じる。

2.1. 比例代表制と政治家たちの戦術

ここでは南アフリカの選挙制度が、党内での派閥抗争に敗れた政治家にとって離党が適切な選択肢になっている点を示す。現在の南アフリカの選挙制度は政党の権限が大きい反面、小政党にも議席を獲得するチャンスがある。知名度の高い政治家や強固な支持基盤を持つ政治家であれば、既存政党に属していくなくても選挙で議席を獲得できる。

上述の通り、南アフリカでは多極共存型民主主義に影響を受けつつ、比例代表制が採用されている。この選挙制度の特徴は前節にまとめたように、2点にまとめられる。第1に、政治家にとって死活的に重要な候補者リストを作成するため、党執行部の影響力が強い。

実際、南アフリカの国政政治家は政党執行部に向けて自身をアピールすることが多い反面、有権者への関心は薄いことが問題視されてきた(Alence and Pitcher 2019, Lieberman 2022)。第2に、小政党であっても議席を得られる確率が高い。全国区では200議席が割り当てられているから、0.5%の得票率毎に政党は1議席を得られる。2024年選挙の投票率に基づけば、1議席の獲得に必要な得票数は約8万人である(Electoral Commission of South Africa 2024)。

この2つの特徴を考慮すると、党内抗争に敗れた派閥が離党して新たな政党を立ち上げるインセンティブが働くことが推測できる。いずれの政党も様々な派閥を抱えていることは既に示唆されているが(Kanyane 2021, Reddy 1995, Phadi, Pearson and Lesaffre 2018, Beresford 2015)、党首選や様々な選挙の結果などをきっかけに、党内での派閥の序列が大きく変化することがある。劣位に置かれた派閥に属する議員は、比例名簿の下位にリストアップされることになる。順位によっては、選挙で当選できないかもしれない。しかし派閥の領袖が全国的に知られている場合や、特定地域で強い支持を得ている場合、離党して新党を立ち上げれば、少なくとも領袖は確実に議席を得られるし、その他複数の派閥メンバーも議席を得られる。また、離党すればリスト順位のためにライバル派閥の顔を伺う必要もなくなるため、発言や行動の自由度も増す。したがって、現行制度は党内の敗れた派閥が離党するインセンティブを高めているといえる。

2.2. 南アフリカ与野党の離党例

ここでは上記のような離党と新党樹立の例をいくつか分析する。ANCからは、ジュリウス・マレマ (Julius Malema) 元青年同盟 (ANC Youth League) 議長による2013年の経済的自由の戦士 (EFF) の分裂、2023年のズマ派の分裂による民族の槍 (MK) の立ち上げの例がある。また、2019年以降、元DA党首のマイマネが「ムムシ・マイマネと南アフリカを一つにしよう (Building One SA with Mmusi Maimane: One SA)」党を、元ケープタウン市長のパトリシア・デ・リル (Patricia de Lille) がグッド (GOOD) を立ち上げ、それぞれDAを離脱している。ここで見られるのは、党内での勢いを失った有力政治家が、自由度を求めて新党を立ち上げ、国民議会の議席を得ていく姿である。この節ではEFF、MKおよびDAから離脱した事例について検討する。

2.2.1. 経済的自由の戦士 (EFF)

ANCは多様な主張のアクターが参加するビッグテント型の組織であった(Lieberman 2022)。ANC党内での複雑な合従連衡に加え、敗れた派閥であっても何等かの役割が与えられる場合が少なくなかった。そのため、長らくANCからの離党はごく限られたものに限られた。例えば1999年のマンデラの後継の決定過程では、ムベキを担ぐ国外派とラマポーザ

を担ぐ国内派の競合が見られた。国外派には新自由主義的なムベキを指導者としつつも、共産党などの左派、ズマのような武装・インテリジェンス部門出身者など多様なアクターが協力し、ムベキ派が勝利を収めた(Ellis 2014: 277)。しかしラマポーザを含む国内派は実業界に「展開」されるという形で役割を与えられ、党内に残る(Southall 2013)。そして20年後にラマポーザはANC総裁の座を得たのである。なお、ムベキからズマへの交代過程で、ムベキ派の一部が国民会議(Congress of the People: COPE)を結成し離党した例がある。しかしムベキ本人がANCへの残留を決めたこともあり、COPEは次第に支持を失っていった(Kanyane 2021)。したがって、2010年代までANCの優位を損なうような離党劇はなかった。

ANCにとって初めての大々的な分裂となったのが、2013年の経済的自由の戦士(EFF)の結成だった。EFFの党首であるジュリウス・マレマはANC青年同盟の元議長であり、しかも親ズマ的だった。若年党員を抱える青年同盟の中で、マレマは貧困や格差問題の是正を目指し、土地の再分配や鉱山の国有化といった左派的な政策を訴えて支持を集めていた。ズマは貧困層への支援拡充を訴えていたことから、マレマは2007年のANC総裁選で青年同盟票を取りまとめ、ズマの当選に貢献したのだった。しかし当選後のズマはマレマらが望むような政策を実施せず、しかも汚職などの不適切な政権運営を続けた。マレマはズマを批判するとともに、急進的な政策や人種主義的な発言を繰り返し、ズマを含むANC首脳部と次第に敵対するようになった。ANC指導部は人種的な発言を理由にマレマの党員資格を停止、これに呼応する形でマレマらが離脱して2013年に結成されたのがEFFである(Cooper 2015, Kanyane 2021, Lieberman 2022, Southall 2009)。

EFFはポピュリスト的な振る舞いで注目を集めた。党員は赤い作業服風のつなぎを着て議会に出席し、野次やエキセントリックな振る舞いをメディア上に流すことで注目を集めてきた。また、ANCが全人種を包摂する方針を示してきたのに対し、EFFはパン・アフリカニズムを標榜するとともに、白人やインド系に対する差別的言動をあおってきた。このようなEFFの姿勢は一部から熱狂的な支持を集め一方で、白人やインド系を中心に警戒感を生むことになった(Butler 2017, Aincer and Whitfield 2021, Fölscher, De Jager, and Nyenhuis 2021, Lieberman 2022, Copeland 2021)。

EFFは一定の成功を収めた。EFFはとくに都市部の黒人若年層を中心に支持を集めることに成功した。南アフリカは若年層が多いため、若年有権者が多い。しかも、若年層の失業率は50%近くに上るなど、若者は既存のANCの政策に批判的であった。再分配を通じて格差や貧困問題の解決を図ろうとするEFFの政策はこうした若年層の支持を集め、初めての国政選挙となる2014年選挙では22議席、2019年には44議席と野党第2党の地位を盤石にした。地方選挙でも善戦しており、都市部を中心に一定の地位を築いてきた(Fölscher, De Jager, and Nyenhuis 2021, Kotze and Bohler-Muller 2019, Copeland 2021, Kanyane 2021)。

マレマらは、ANCから離脱しEFFを立ち上げることで政治シーンの中心に躍り出ることに成功したといえる。マレマはANC党内でサイドライン化されつつあった。離党していくな

ければ、そのまま目立たない政治家としてキャリアを終えていたかもしれない。しかし彼らのメインターゲットである黒人若年層は全国に広く存在する人々であり、マレマは ANC から離脱したとしても相応の支持を集めることができた。マレマは EFF 党首として独立することで衆目を集めることに成功したし、政策を自由に訴えることができるようになった。

マレマ自身も EFF の結党に後悔はないようである。実際、EFF の躍進を見て ANC がマレマに和解と ANC への再加盟をオファーした際には、マレマは拒否した(Copeland 2021)。マレマは ANC 内部で一派閥の領袖として生きるより、野党であっても党首として生きる道を選んだのである。

2.2.2. 民族の槍 (MK)

民族の槍 (MK) の実態はズマ派である。MK は解放闘争期の ANC の武装闘争部門の名称であり、多大な犠牲のもとに解放闘争を進めてきたことで知られる(Ellis 2014)。しかし 2024 年に政党として成立した MK はあくまでズマ派が 2023 年 12 月に結成した新政党であり、闘争期の MK と連続性はない。実際、解放闘争を戦った本来の MK の退役軍人一部は、ズマの新党が MK を名乗ることを批判している(Simelane 2024)。

ズマ派は、ズマの出身地であるクワズールー・ナタールやズールー人コミュニティーから支持を得てきた。2007 年の ANC 総裁選では、ムベキの新自由主義的政策に反発が強まる中、ズマとムベキの一騎打ちとなった。ANC 総裁選では、党員比に応じて各州の地方支部に票が割り当てられる。そこでズマは出身地であるクワズールー・ナタールなどで党員拡大に努めた。こうした工作を一因としてズマは ANC 総裁の座を掴み、翌 2009 年には大統領に就任したのだった。就任後、ズマはクワズールー・ナタールで党員への公職の分配などを通じて支持基盤を安定させ、同州で長らく一定の規模感を誇ってきた IFP の票の獲得にも成功してきた(Southall 2009, Booysen 2011, Southall 2013)。

ズマの汚職スキャンダルはズマ自身の失脚につながったが、ラマポーザ政権の発足後もズマ派は一定の地位を保った。2017 年の ANC 総裁選では僅差でラマポーザが勝利したものの、ズマ派のエース・マハシューレ (Ace Magashule) が副総裁に選出されるなど、ズマ派は一定の存在感を見せつけた。党内基盤が脆弱な状態に置かれたラマポーザは、「団結 (Unity)」をかけ、慎重な政権運営を迫られた(Kanyane 2021)。

しかしそれでズマ派の勢力は削がれていく。ラマポーザ政権のもとで設置されたゾンド委員会がズマの国家捕獲に関する一連の汚職スキャンダルを調査し、2022 年に成果を公表した。委員会の調査に非協力的な姿勢を示したズマは法廷侮辱を理由に有罪判決が出された。さらに 2022 年の ANC 総裁選では汚職などに関与した党員の幹部選挙立候補を認めない新たな規定を設け(Grootes 2022)、ズマと近く、汚職の嫌疑をかけられた政治家への圧力を強めた。実際、マハシューレは汚職を理由に総裁選で党員資格が停止され、副総裁の座

を追われた(Tandwa 2021)。

こうした状況下で結成されたのが MK である。ズマは 2023 年に MK を党として立ち上げることを宣言した。ANC は敵対政党支援を理由にズマを除名した(BBC 2024)。上述の通り、ズマ派はクワズールー・ナタールに地盤を持つ。また、大都市であるプレトリアやジョハネスバーグを抱えるハウテン州にもズールー人コミュニティーがあり、ズマ派は一定の支持を見込めた。実際、2024 年の選挙では、MK はクワズールー・ナタール州で 19 議席(定数 41)、ハウテン州で 5 議席(定数 47)を地域票として獲得している。その他の地域では MK の支持は限られたが、結果的に EFF を抜く 57 議席を獲得し、ANC、DA に次ぐ議会第 3 党となった (Electoral Commission of South Africa 2024)。DA が連立政権に入ったことで MK は野党第 1 党になった。

ANC 党内で周縁化される一方、強い地盤を持つがゆえにズマ派は新党の結成という手段を選ぶことができた。クワズールー・ナタールなどの地方選挙では ANC を脅かす存在になるかもしれない。今後 MK がどのような動きをするかは本稿執筆時点ではわからないが、野党第 1 党の地位を得たことから、南アフリカ政治の中で無視できない存在になるだろう。

2.2.3. 民主同盟 (DA) の派閥抗争

既存政党からの分裂は与党 ANC に限った話ではなく、長らく野党第 1 党だった DA からの事例も観察される。DA からは元党首のムムシ・マイマネと元ケープタウン市長のパトリシア・デ＝リルという 2 人の有力政治家が離党し、それぞれ新党を結成した。両者ともに党内で立場が弱くなる中での離党劇であり、上述の想定に当てはまる事例である。

DA が「白人政党」のイメージからの脱却を目指す中で浮上したのがマイマネとデ＝リルだった。上述の通り 2007 年のジレの DA 党首就任以降、DA は黒人を中心に支持基盤を広げようとしてきた。デ＝リルは独立民主党 (Independent Democrat: ID) を率い、西ケープ州のカラードコミュニティーから一定の支持を集めてきた。ジレは ID の合流を呼びかけ、その見返りとしてデ＝リルは大都市ケープタウンの市長に就任したのだった。また、若く聰明なイメージを持つマイマネは黒人有権者への支持拡大を図る中で浮上し、ジレが西ケープ州知事に就任する際に DA 党首の座を譲られたのだった(Southall 2014: 2022)。

しかし DA 党内の主導権は従来通り白人政治家が握ってきた。1990 年代末にトニー・レオン (Tony Leon) 党首がのちの DA の躍進の基盤を作ったが、党首としての任期が長引くにつれ新鮮味を失っていった。執行部がジレに党首を任せたのは、ある種のマンネリ化対策であった。実態はレオンや彼の側近だったライアン・クッツェー (Ryan Coetzee)、院内総務のジョン・ステーンフイゼン (John Steenhuisen) らが、党執行部の支持のもと、引き続き党の運営の中心を担ってきた(Southall 2022: 168-176)。

したがって、要職に就いたデ＝リルやマイマネが自由にふるまえたわけではない。デ＝

リルはケープタウン市の治安部局運営を巡って DA 西ケープ州執行部と対立し、辞任を余儀なくされる(Kanyane 2021, Kotze and Bohler-Muller 2019, Africa 2019)。また、マイマネは2019年選挙での不振を理由に辞職を迫られた。2019年選挙では DA が 2%ほど支持を減らした一方、白人右派の自由戦線プラス (Vryheidsfront Plus : FF+) が支持を得た。マイマネを党首に据えたことが従来の DA 支持者だった白人票の喪失につながったとされ、マイマネはスケープゴートにされたのだった(Schulz-Herzenberg 2019)。

デリルとマイマネは党内で傍流化したとはいえ、両者とも一定の知名度があり、党内での失脚直後に離党した。デリルは 2018 年に新党 GOOD を立ち上げて DA を離党した。また、マイマネも 2019 年の党首辞任後に「DA にはビジョンがない」といって離党し、自らの政党を立ち上げた(Southall 2022: 169)。ここで注目すべきは、デリルもマイマネも知名度や地盤があったことである。デリルは DA 加盟前からカラード層の支持を集めていだし、マイマネは党首として知名度が高かった。両者とも数議席の獲得ではあったものの、離党後も議員として活動できた。さらに、デリルの場合には 2019 年、そして 2024 年にラマポーザ内閣に入閣するなど、DA 時代以上に政治機会を獲得することに成功している。

3. 南アフリカの選挙を整理しなおす

2010 年代には与野党ともにサイドライン化された有力政治家が離党し、新たな政党を立ち上げる例が散見された。では、小政党を含む南アフリカ政党政治の全体像はどのような状況にあるのだろうか。

この節では南アフリカ選挙管理委員会 (Electoral Commission of South Africa) の選挙結果データをもとに、1994 年以降の南アフリカの動向を数値的な基準で整理する。諸外国との比較や経時的な評価の観点から、数値化は意義がある。ここで観察したいポイントは 2 つある。第 1 に南アフリカの政党政治はどの程度多元化しているのかという点である。第 2 に既存の大政党からの分離は、政党政治の構造にどの程度の影響を持っているのかというものである。

3.1. 南アフリカ政治の多元性を測定する

南アフリカの政党政治はどのように、またどの程度多元的なのだろうか。そして、多元性はどのように変化してきたのだろうか。既存の議論でも ANC 優位から次第に競合的になってきた様子が描かれてきたが、叙述的であった。そこでここでは客観的データに基づきつつ、先行研究の議論を整理し、南アフリカの政党政治の全体像を描きなおす。

ここではハーフィンダール・ハーシュマン指数 (Herfindahl-Hirschman Index: HHI) に基づいて南アフリカの政党政治の多元性を測る。HHI は市場の寡占度を評価する際にも用い

られる指標で、比較政治学では政党政治における競合度を測るために用いられる。HHI は議席を得たそれぞれの政党の獲得議席割合の二乗和である。ある選挙での政党 i の獲得議席の割合を x_i としたとき、その選挙の HHI は以下の数式で算出される(Golosov 2010)。

$$HHI = \sum x_i^2$$

HHI の値は 0 から 1 の間をとるが、小さいほど競合度が高い。例えば A 党と B 党という政党が選挙に参加し、それぞれ同数の議席を得た場合、 $(0.5)^2+(0.5)^2=0.5$ となる。しかしもし A 党が議席の 75%、B 党が議席の 25% を獲得したとするなら、HHI は $(0.75)^2+(0.25)^2=0.625$ となる。前者のケースでは A 党と B 党は拮抗しているが、後者のケースでは A 党が B 党を圧倒している。前者の HHI は 0.5、後者は 0.625 で、競合度が高い前者の HHI が低い。

また、HHI の逆数 (= 1/HHI) をとると有効政党数 (Number of Efficient Party) を算出できる。議席を得た政党の数を単純に数えるだけでも、その議会の政党数はわかる。しかし先ほどの例のように 2 党しかない場合、実際の政党数は同じでも政党間の競合関係の程度は異なる。有効政党数を用いると、より精緻に政党間の関係を測定できる。前者の例の有効政党数は $1/0.5=2$ 、後者の有効政党数は $1/0.625=1.6$ となる。両者ともに 2 党が議席を得ていることには変わらないが、前者では 2 党が拮抗しており、後者では A 党が圧倒している様子が数値的にも把握できる。もちろん 3 党以上になるなど複雑なケースでは、このような直感的な判断は適切ではない場合もあるが、一貫した基準に基づいて判断できる点で、HHI や有効政党数は経時的な変化や事例間の比較に適した尺度である(Golosov 2010)。レイプハルトも有効政党数を利用して選挙制度と政党政治の関係を評価している (Lijphart 2012)。

3.2. 既存政党の分裂による南アフリカ政治の多元化

以上に基づいて、1994 年以降の南アフリカの政党政治の動向を南アフリカ選挙管理委員会のデータをもとに整理してみたい。まず、参加政党数、議席を獲得した政党数を数え上げてみよう。表 2 は国民議会に立候補した政党の数と、選挙により 1 議席でも獲得した政党の数をまとめたものである。表 2 からは、明らかに参加政党の数は増えており、特に 2010 年代を通じて増加傾向にあることがわかる。もっとも、それが単純に議席獲得につながっていないこともうかがえる。2024 年選挙では 1999 年以降、多少の増減はあるにせよ、12-15 程度の政党しか議席を獲得していない。2019 年と 2024 年の選挙では議席を獲得する政党が増えてはいるが、参加政党数の伸びほど顕著ではない。

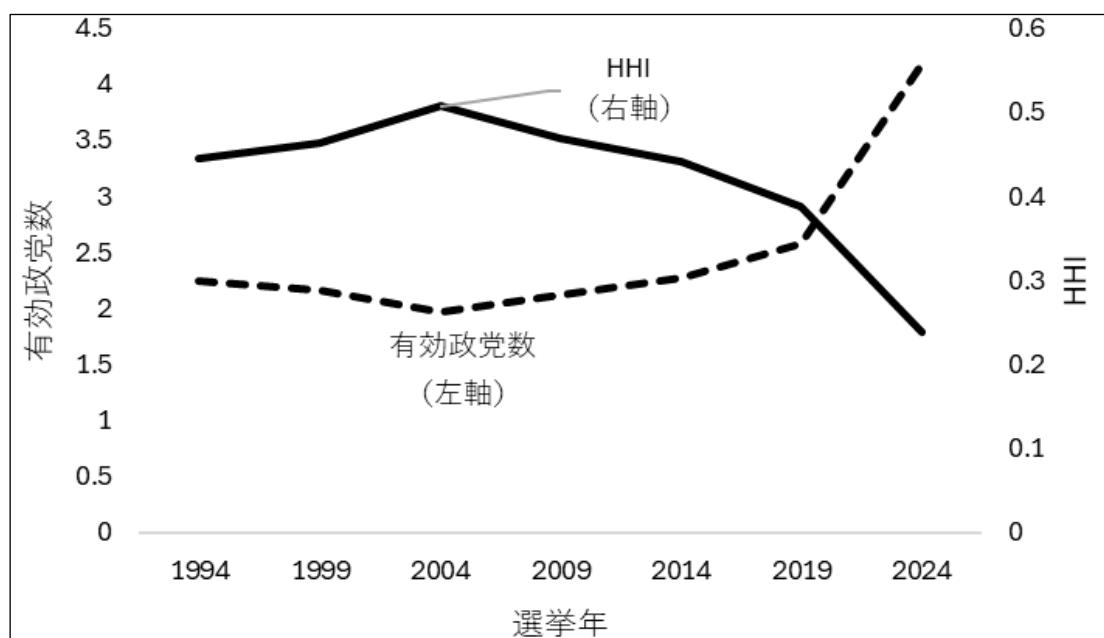
表 2 参加政党・議席獲得政党数の変遷

選挙年	1994	1999	2004	2009	2014	2019	2024
参加政党数	19	16	21	26	29	48	58
議席を獲得した政党数	7	13	12	15	14	16	18

出典：Electoral Commission of South Africa データをもとに筆者作成

続いて競合度の変遷を確認しよう。図1は南アフリカの国民議会選挙の結果をもとに HHI と有効政党数を算出した結果である。図1は、長期的に競合度が強まっていることを示している。ANC の得票率が最高を記録した2004年をピークに HHI は低下傾向に、有効政党数は増加傾向にある。この表は ANC の支持が凋落し、他の政党の支持が伸びているという先行研究の主張を裏付けている。また、2019年から2024年にかけての上昇は顕著である。2024年の選挙が過去に例がないほど競争的であったことは間違いない。

図1 南アフリカ国民議会選挙の競合度（1994-2024）



出典：Electoral Commission of South Africa データをもとに筆者作成

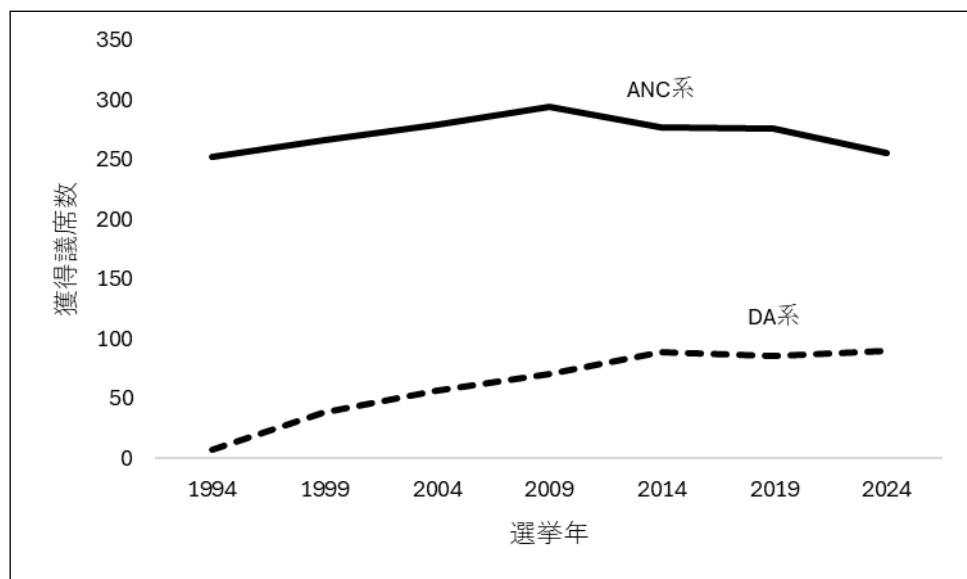
前節では既存政党からの離党が頻繁にみられる様子を確認したが、こうした政党の離脱の影響はどの程度なのだろうか。図2は ANC、COPE、EFF、MK を ANC 系の政党、DA、One SA、GOOD を DA 系とみなし、それぞれの政党の獲得議席の和を示したものである。

ここから観察できるのは、南アフリカの政党の多元化は、主に既存政党からの離脱によって起きているということである。国民議会の議席の大半は ANC 系と DA 系によって占められており、2009年以降では ANC 系と DA 系の合計は全議席の9割前後を占めている。

ANC と ANC から分派した政党の合計獲得議席は大きく変化していない。そして、分派した政党はいずれも議席を獲得している。

言いかえれば、国民党が消滅した 2000 年代以降の南アフリカの政党構成は、ANC 系、DA 系、その他小政党という大きな構造で理解ができる。そして、2010 年代以降は ANC 系と DA 系の政党の分裂が起きているのである。国民党が消滅して DA に多数が合流して以来、全体の議席の 6 割程度を ANC 系が占め、2 割程度を DA 系が占めてきた。残る 2 割程度はその他の政党が占めている。このうち、IFP やアフリカーナーの保守政党である FF+などの老舗の小政党が、ANC や DA には及ばないものの、一定の議席を占めてきた。この大きな構図の中で、ANC、DA それぞれから分派が形成されていった。2010 年代に進んだ南アフリカ政治の多元化は、ANC、DA、老舗の小政党という構図のなかで、ANC と DA の分裂が進んだ結果なのである。

図 2 ANC 系および DA 系の獲得議席の変遷



出典：Electoral Commission of South Africa データをもとに筆者作成

以上のデータから 2 つの結論が導ける。第 1 に全体として南アフリカの政党政治は、制度の設計通り多元的になっていったということである。参加政党数や HHI や有効政党数の観察からは、南アフリカの選挙に参加する政党の数が増えており、かつ競合度も高くなっている様子が分かった。このような多元性の進展は制度が予期していたことである。比例代表制はそもそも少数者の意見を代表しやすくする性質を持つ制度である。同じく多極共存型民主主義に位置付けられるオランダやベルギーの有効政党数は 4.8 前後である (Lijphart 2012)。比例代表であるにもかかわらず有効政党数が極めて低いこれまでの南アフリカは特異な事例であったが、次第に有効政党数は増えており、2024 年の選挙では多極共存型とほ

ほぼ同等の水準になっている。少数政党でも議席を獲得できるチャンスがある以上、派閥闘争に敗れた議員が離党して新党を立ち上げることは、制度を正しく理解した合理的な行動であるといえるし、制度の想定と現実のギャップが縮まってきたと評価できる。

第2に、多元性は主として ANC や DA からの離党による新党結成によって起きていることである。IFP や FF+のような老舗の小政党は従来から一定の支持を集めてきたが、2010年代以降は ANC および DA から、一部の政治家が支持者の票とともに離脱し、競合が加速しているのである。現在の南アフリカの政党は様々な派閥の連合体的性格から脱却しつつある。従来の南アフリカの政党はいわゆる「ビッグテント」型であり、党内には様々な派閥が存在し、一時的に勢力争いに敗れても党内に残る傾向があった(Lieberman 2022)。しかし党内の勢力争いに敗れた派閥の領袖たちは、党内で起死回生の機会を待つよりも、離党して新党を立ち上げ、有権者に自らの主義主張を直接問う傾向を強めているのである。ANC 主流派とは全く異なる左派的政策を堂々と主張する EFF はその最たる例であるといえよう。

4. おわりに

2024年の選挙は民主化後の南アフリカにとって転換点である。ANCの一党優位体制は終わり、連立政権の時代が始まった。そして DA、MK、EFF のような大政党だけでなく、小政党の存在感も無視できなくなっている。今後の南アフリカ政治研究では、従来よりも広いアクターに注目する必要があるだろう。

このような問題背景のもと、本稿は南アフリカの政党政治の全貌について、データに基づき分析を行った。ここで明らかになったことは2点にまとめられる。第1に、設立される新党の多くは旧来の大政党内で敗れた派閥の領袖が独立したものであることである。第2に、南アフリカの政党政治は多元性を強めているものの、実態としては ANC および DA から分裂した政党が票を得ているに過ぎないということである。言い換えれば、南アフリカ政治の多元性は ANC や DA などの大政党の分裂の結果であり、これまで存在しなかった新たなアクターが出現しているわけではない。新たに結成された政党のうち、議席を獲得できるのは大政党から分裂した一部の小政党に限られる。

南アフリカは「ビッグテント」のもとで繰り広げられる派閥間政治から、連立政権の時代に入ったといえるかもしれない。連立政権では政党間で様々な調整や議論が行われる。政党間の交渉は、政党間の熟議の機会ができるという望ましい効果がある一方、密室での決め事が常態化すれば汚職やネポティズムがむしろ悪化しかねない危険もある(Lijphart 2012)。本稿で論じてきたように、南アフリカの小政党はかつての大政党の派閥である。したがって、一方では派閥間の不透明な取引が政党間の交渉という、より透明な形態に変化する可能性がある。逆に連立政権によって、これまで議会で繰り広げられてきた論議が密室での会合になってしまい、政策決定過程が不透明になる可能性もある。今後の南アフリ

力がどちらの道をたどるかはわからない。しかし制度と現実のギャップが縮まってきたことで、他の多極共存型デモクラシーに分類される諸国の事例を比較参照した分析が可能になるかもしれない。

もっとも、制度は小政党が常に代表されることを保障しない。市民の支持がなければどのような政党も議席を獲得できない。現時点でも、知名度や支持基盤の面で一定数の支持が見込める政党だけが議席を獲得できている。また、結党直後はある程度の支持を得つつも議席を失った例もある。2008年にANCからムベキ派の一部が離脱して結成した国民会議(COPE)は2009年選挙で30議席を獲得したが、目立ったリーダーの不在やANCとの差別化ができず、選挙を重ねるごとに支持を減らしていった(Booysen 2011)。2024年の選挙では遂に議席を獲得できなかった。

多数の政党が競合する状況下では、政策やリーダーの姿勢をより洗練させなければ生き残れず、淘汰される。2024年選挙の結果は南アフリカの政党に対し、より市民に支持される政策の提示、より市民に信頼される政治家の擁立、そして多様な利害を持つ他党との交渉など、高度な政治運営を必要とする時代の始まりを告げたといえるだろう。

参考文献

Web サイト

Electoral Commission of South Africa. 2024. National and Provincial election results. <https://results.elections.org.za/home/Downloads/NPE-Results> (2024年10月10日閲覧)。

文献資料

牧野久美子. 2024. 「南アフリカの2024年総選挙と連立政治一二度目の「国民統合政府」の脆弱な基盤ー」『アフリカレポート』62. 51-57.

Africa, Cherrel. 2019. "Do Election Campaigns Matter in South Africa? An Examination of Fluctuations in Support for the ANC, DA, IFP and NNP 1994–2019." *Politikon* 46 (4): 371–89. <https://doi.org/10.1080/02589346.2019.1684647>.

Alence, Rod, and Anne Pitcher. 2019. "Resisting State Capture in South Africa." *Journal of Democracy* 30 (4): 5–19. <https://doi.org/10.1353/jod.2019.0065>.

Alexander, Peter. 2010. "Rebellion of the Poor: South Africa's Service Delivery Protests - a Preliminary Analysis." *Review of African Political Economy* 37 (123): 25–40. <https://doi.org/10.1080/03056241003637870>.

Ancer, Jonathan, and Chris Whitfield. 2021. *Joining the Dots: An Unauthorised Biography of Pravin Gordhan*. Johannesburg and Cape Town: Jonathan Ball Publishers.

BBC. 2024. "South Africa's Top Court Bars Zuma from Standing in Election," May 20, 2024.

- Beresford, Alexander. 2015. "Power, Patronage, and Gatekeeper Politics in South Africa." *African Affairs* 114 (455): 226–48. <https://doi.org/10.1093/afraf/adu083>.
- Booysen, Susan. 2011. *The African National Congress and the Regeneration of Political Power*. Johannesburg: Wits University Press.
- Butler, Anthony. 2017. *Contemporary South Africa*. Third Edit. London: Palgrave Macmillan.
- Cooper, Ian. 2015. "Zuma, Malema and the Provinces: Factional Conflict within the African National Congress." *Transformation: Critical Perspectives on Southern Africa* 87 (1): 151–74. <https://doi.org/10.1353/trn.2015.0009>.
- Copeland, Tiffany Thames. 2021. "We Are Not Scared to Die" Julius Malema and the New Movement for African Liberation. New York: Peter Lang.
- Ellis, Stephen. 2014. *External Mission: The ANC in Exile 1960-1990*. London: Hurst & Company.
- Ferreira, Emsie. 2024. "Ramaphosa May Make Space in Cabinet for Smaller Parties." *Mail & Guardian*, June 29, 2024.
- Ferreira, Emsie, and Paddy Harper. 2024. "Good to Govern: After a Month of Waiting, Ramaphosa Finally Appoints His Unity Cabinet." *Mail & Guardian*, June 30, 2024.
- Fölscher, Marine, Nicola De Jager, and Robert Nyenhuis. 2021. "Populist Parties Shifting the Political Discourse? A Case Study of the Economic Freedom Fighters in South Africa." *Journal of Modern African Studies* 59 (4): 535–58. <https://doi.org/10.1017/S0022278X21000276>.
- Giliomee, Hermann. 2012. *The Last Afrikaner Leaders: A Supreme Test of Power*. Cape Town: Tafelburg.
- Golosov, Grigorii V. 2010. "The Effective Number of Parties: A New Approach." *Party Politics* 16 (2): 171–92. <https://doi.org/10.1177/1354068809339538>.
- Grootes, Stephen. 2022. "Kgalema Motlanthe's Common Sense ANC Election Rules – Great Move, 20 Years Too Late?" *Daily Maverick*, August 22, 2022.
- Habib, Adam. 2013. *South Africa's Suspended Revolution: Hopes and Prospects*. Johannesburg: Wits University Press.
- Kanyane, Modimowabarwa. 2021. "Factions and Factionalism in South African Party Politics—Appraising (de)Merits." *Politikon* 48 (4): 1–17. <https://doi.org/10.1080/02589346.2021.1913553>.
- Khambule, Isaac, Amarone Nomdo, Babalwa Siswana, and Gilbert Fokou. 2019. "Coexistence as a Strategy for Opposition Parties in Challenging the African National Congress' One-Party Dominance." *Politikon* 46 (4): 427–42. <https://doi.org/10.1080/02589346.2019.1682784>.
- Kotze, Joleen Steyn, and Narnia Bohler-Muller. 2019. "Quo Vadis? Reflections on the 2019 South African General Elections." *Politikon* 46 (4): 365–70. <https://doi.org/10.1080/02589346.2019.1692520>.

- Lieberman, Evan. 2022. *Until We Have Won Our Liberty: South Africa after Apartheid*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Lijphart, Arend. 2012. *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*. New Heaven: Yale University Press.
- Phadi, Mosa, Joel Pearson and Thomas Lesaffre. 2018. “The Seeds of Perpetual Instability: The Case of Mogalakwena Local Municipality in South Africa.” *Journal of Southern African Studies* 44 (4): 593–611. <https://doi.org/10.1080/03057070.2018.1464301>.
- Reddy, P.S. 1995. “Local Government Training: A Review of the South African Experience.” *Public Personnel Management* 24 (2): 181–92.
- Schulz-Herzenberg, Collette. 2019. “The Decline of Partisan Voting and the Rise in Electoral Uncertainty in South Africa’s 2019 General Elections.” *Politikon* 46 (4): 462–80. <https://doi.org/10.1080/02589346.2019.1686235>.
- Simelane, Lunga. 2024. “Military Veterans: ANC Fails to Care for Its Own.” *Citizen*, April 12, 2024.
- Southall, Roger. 2009. “Understanding the ‘Zuma Tsunami.’” *Review of African Political Economy* 36 (121): 317–33.
- . 2013. *Liberation Movements in Power: Party & States in Southern Africa*. Rochester: James Currey.
- . 2014. “The Contradictions of Party Dominance in South Africa.” In *The Quest for Constitutionalism: South Africa since 1994*, edited by Veronica Federico, Hugh Corder, and Romano Orrù, 155–68. Farnham: Ashgate.
- . 2022. *Whites and Democracy in South Africa*. Suffolk: James Currey.
- Tandwa, Lizeka. 2021. “The ANC’s Step-aside Rule Explained: Past, Present and What’s next for Ace & Co.” *Mail & Guardian*, May 2, 2021.